

## 化石からわかる三重県の地史

(三重県立博物館)

三重県藤原岳には、石灰岩層にフズリナ、ウミユリ、サンゴの化石を産する。フズリナは2億5千万年まで栄えた単細胞生物の一つである。ウミユリは、動物でウニ、ヒトデ、ナマコなどの仲間である。サンゴの化石が産することから、今よりずっと暖かかったと考えられる。三重県では、藤原岳をはじめ、古成層を形成するところでは、石灰岩にウミユリやフズリナの化石を産する。このことから、三畳紀前期になるまで海におおわれていたと考えられる。

### トバリユウ(鳥羽竜)の発見

鳥羽市安楽島町の海岸には、中生代白亜紀前期(1億4,500万年～9,700万年前)の松尾層群が分布している。その海岸で平成8(1996)年7月に恐竜化石が見つかった。発掘調査の結果、尾椎4個、左右の上腕骨、左右の大腿骨、左橈骨、右脛骨、右腓骨、左座骨などが発見された。見つかった骨から草食恐竜のティタノサウルス上科に属する恐竜であることが分かった。

トバリユウは、全長は16～18m、体重は31～32トンと推定されている。

トバリユウの骨は、日本で見つかった恐竜化石としては、一番大きなもので、竜脚類1個体分の骨が多数見つかったのも初めてのことである。



今から、300～400万年前に、淡水で、今の琵琶湖の約6倍もある大きな湖ができた。この湖は東海湖と呼ばれるもので、ここに堆積したのが奄芸層群で、ちょうどこのころ、鈴鹿山脈の西側に古琵琶湖ができていた。

奄芸層群の黒田層と亀山層から発掘されたステゴドン・エレファントイデス象は、古い型のステゴドンであり、藤原町で発見されたパラステゴドン・アカシエンシス(アカシ象)は、同じ仲間新しい時代の象である。

ステゴドン属は、第三紀鮮新世～更新世にかけて、東南アジアやアフリカを中心に繁栄した旧象の一群である。エレファントイデス象は約350万年前にすんでいた象である。1955年安芸郡河芸町の黒田層から、臼歯(上下4本そろったもの)が発見され、1977年には、亀山市住山町の亀山層から、門歯(牙)が発見された。この門歯は、欠けている部分を含めると牙の長さは2.2mとなり、肩の高さは3mと推定される巨大な象である。(両方とも、津市の県立博物館にて展示)

パラステゴドン属(アカシ象の仲間)は、ステゴドンからエレファスに移る中間の種族である。日本以外では、ジャワやフィリピンだけである。アカシ象の化石が発見されたのは、奄芸層群の上部に属する大泉層(第三紀鮮新世末期)からである。1939年員弁郡笠田大池で桑名中学の中学生だった2人の生徒によって、アカシ象の臼歯の化石が発見された。その化石は第二次世界大戦で戦火にあって、今は計測値だけ残る幻の化石となってしまった。同じ地層から、当時の環境を知る手がかりとなる植物化石(オオバタグルミの堅果、アベマキの殻斗、カシワの葉、エゴノキの種子、メタセコイヤの球果)が見つかっている。また、1951年～1957年にわたり、員弁郡藤原町上之山田で、ほぼ全骨格に近いアカシ象の化石が見つかり、現在、津市の県立博物館に展示されている。その他、中里小学校、藤原中学校、藤原岳自然科学館のも、それぞれ門歯、または臼歯が保存されている。同じ地層から、植物化石(メタセコイヤ、エゴノキ、シキシマハマナツメ、オオバタグルミ、ニレバケヤキ、スモモ、ヒノキ、ツガの一種)、淡水産貝化石(タニシ、ドブガイ、クリスタリア、イシガイ、カワニナ)も見つかっている。なお、オオバタグルミは、員弁郡で発見されたのが最初でアメリカのチェニー博士が名づけ親である。従来のものに比べて、特別大型であったことから名づけられた。三重県下では、アカシ象が産した地層と同じ地層から、ニッポンムカシジカやカメの一種の化石も見つかっている。

アカシ象の仲間の化石が、ビルマや東南アジアでも発見されていることから、大陸と陸続きの時代に日

本にわたってきたことがわかる。当時、日本は象にとって食べ物が豊かで暖かかったと考えられる。また、アカシ象が発見された地層から産した植物化石(特に、メタセコイヤ)から、当時、日本(三重県)は大森林におおわれていたとも考えられる。というのは、メタセコイヤは大木に成長するからである。これは第三紀に繁茂し、現在にも残っているので「生きている化石」とも呼ばれている。

メタセコイヤは明正中学校の中庭に植えられており、見ることができる。



メタセコイヤ並木